

## 卒業前看護技術トレーニング2年目の取り組み

新潟医療福祉大学 看護学科・阿部明美  
目黒優子  
つくば国際大学 医療保健学部 看護学科・志田久美子  
人間総合科学大学 保健医療学部 看護学科・荒木玲子

## 【背景】

2009年7月「保健師助産師看護師法及び看護師等の人材確保の促進に関する法律の一部を改正する法律」が成立し、2010年4月から医療機関等における新人看護職員の研修が努力義務化された。一方、看護教育課程においては、看護実践能力の強化に向け、2008年保健師助産師看護師学校養成所指定規則が一部改正され、多くの看護系学校は、2009年度入学生から新カリキュラムを試行している。本トレーニングは、この新カリキュラム試行前の入学生において、正規の教科目外での学生の自主的参加による卒業後の看護実践に備えるべく企画され、今回2回目(H22年度)を迎えた。トレーニング概要と学生へのアンケート結果を中心に、1回目(H21年度)の結果との比較を交え報告する。

## 【方法】

本トレーニングの目的は、卒業直前にある4年次学生が卒業後の就職先での実践に備えるため、すぐに必要となる看護技術について自主的にトレーニングすることである。学生の参加は自由意志であり、70名(卒業生1名を含む)が参加した。2/28, 3/1を準備・事前学習期間とし、3/3・4(学生は両日のどちらかで実施)でトレーニングを実施した。学生はグループを編成(1グループ約6名)し、グループごとに技術を実施した。実施技術内容は学生の希望を考慮し、①静脈血採血(希望者は同意書にサインの上、学生同士で実施)、②点滴準備・輸液ポンプの操作、③一時的導尿、④口鼻腔内吸引とした。トレーニング当日は、教員が安全確認とともに正しい技術の習得に向け助言・指導にあたった。

終了後、参加学生を対象に、アンケートを無記名で実施。アンケート内容は、実施看護技術項目の達成状況に関するもの7項目、態度評価やトレーニング全体への評価に関するもの4項目の計11項目について4段階評定法で回答を求めた。さらに、今後の課題や感想など自由記述による回答を求めた。

## 【結果】

アンケートの回収数は59名(回収率85.5%)であった。

実施看護技術の達成状況は、『非常にそう思う』または『そう思う』と答えた人は多い順に「シミュレータでの採血」54名(91.5%)、「口鼻腔内吸引」53名(89.8%)、「他学生の静脈血採血」48名(81.3%)、「点滴滴下調節」47名(79.7%)、「一時的導尿」45名(76.3%)、「点滴準備」43名(72.9%)、「輸液ポンプの操作」42名(71.2)で、70~90%の学生は各看護

技術について概ね実施できたと評価していた。態度面では、「事前学習を十分行った」は35名(59.3%)、「積極的に取り組んだ」54名(91.6%)で、「行ったことは卒業後に役立つ」および「参加してよかった」はいずれも59名(100%)が『非常にそう思う』または『そう思う』と答えた。実施技術の達成状況およびその他の評価について、『非常にそう思う』または『そう思う』と答えた割合は、H21年度のアンケート結果と概ね同じ結果であった。

自由記述では、「今後の課題」は記述数の多い順に『確実な無菌操作』(27記述)が最も多く、次いで『知識の補充、根拠の明確化』(24記述)、『技術(無菌操作以外)の確実な修得』(12記述)、『落ち着いて、余裕を持って実施する』(7記述)、『経験の蓄積』(6記述)であった。「感想・意見」では、『いい経験になった、やってよかった』(26記述)が最も多く、次いで『知識・技術の再確認になった』(14記述)、『企画に対する意見・課題』(12記述)、『自身の未熟さを実感』(11記述)、『今後の課題に気づけた』(10記述)等であった。

## 【考察】

1回目のトレーニング同様、体験技術の評価は概ね達成できており、また、自身の技術や知識の不十分さも再認識する機会ともなり、そのことが自身の今後の課題認識へとつながっていた。本トレーニングで実施した技術項目は、三輪木ら<sup>1)</sup>の調査からも、臨地実習中に学生が体験(実施・見学)する技術としては体験機会の少ない技術であり、新人看護師が“専門知識”とともに“看護技術”は職務上の困難の程度が高いと感じている結果<sup>2)</sup>からも、就業直前の本トレーニングの実施は有効であったと考える。

一方、比較的達成状況の低かった「点滴準備」や「輸液ポンプの操作」をはじめ、課題認識の高かった『無菌操作』については、難易度の高い技術として、いかに限られた時間で効率よくしかも十分なトレーニングにしていけるか、学生のニーズ・状況を考慮しながらさらに検討し、企画していく必要がある。

## 【結論】

1回目同様、実施看護技術は概ね実施できたと評価していた。また、トレーニングへの参加は、より確実な技術の習得や根拠となる知識獲得への動機づけとなっており、就業への心構えにもつながるものとして有効であった。

## 【文献】

- 1) 三輪木君子 他:臨地実習における「看護技術の習得状況」の実態(1)―学生用技術ノートから―、静岡県立大学短期大学部研究紀要. 19. 13-25. 2005.
- 2) 唐澤由美子 他:就職後1ヶ月と3ヶ月に新人看護師が感じる職務上の困難と欲しい支援. 長野県看護大学紀要 10. 79-87. 2008.